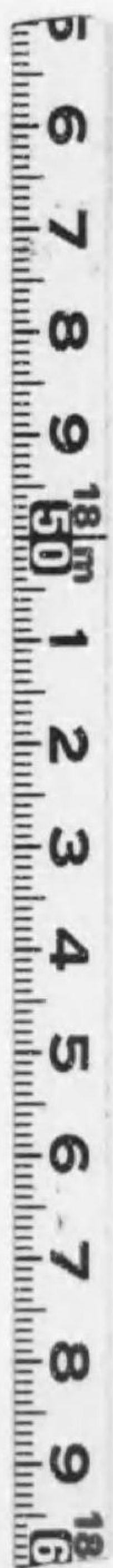


特116
845



始



塔金黃

2016

845



特116
845

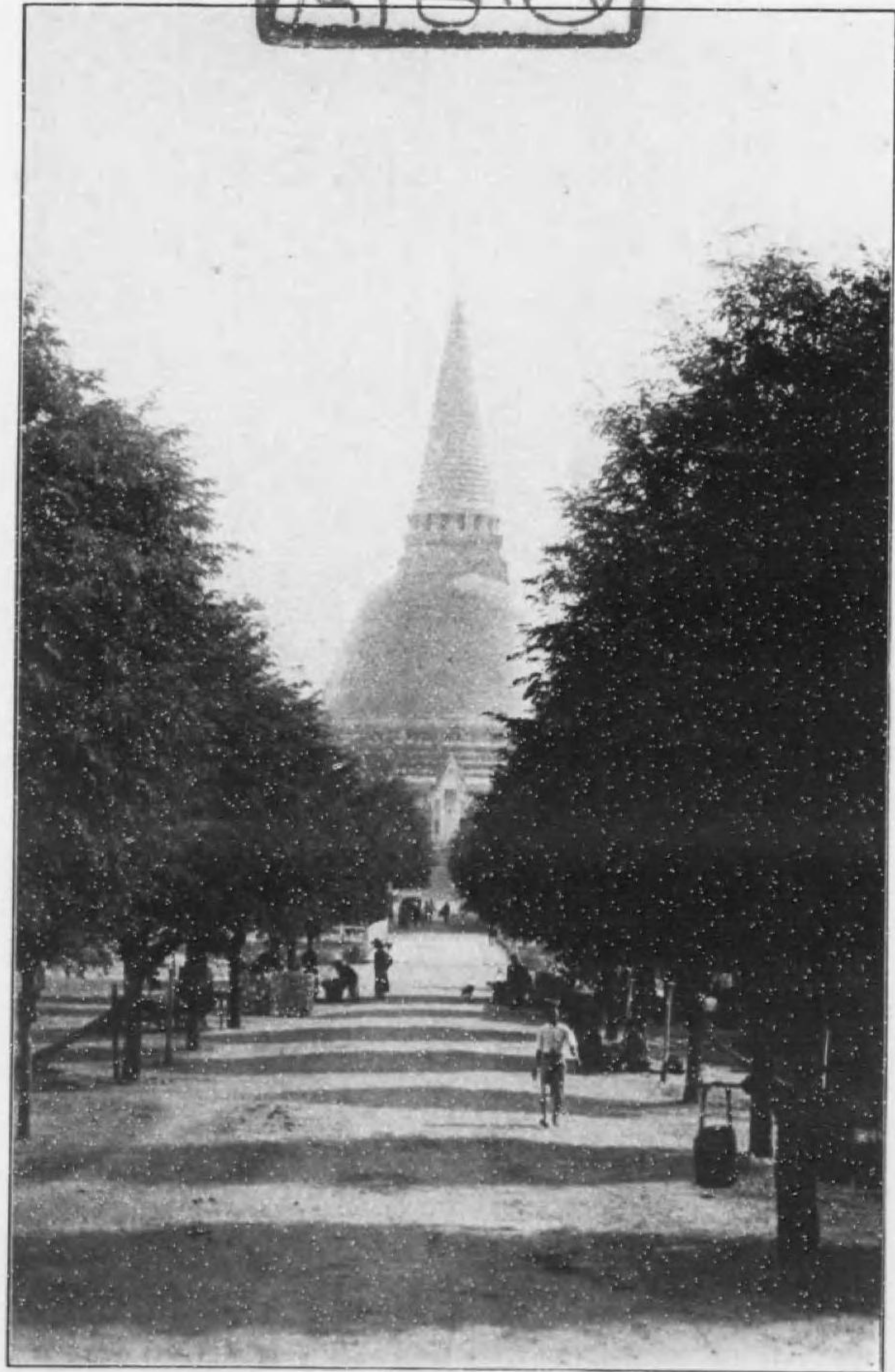
はしかき

なき母様とそのまな子との靈前に
つゝしみてこのつたなきあつめを
そなへまつる

大正四年二月十九日

美知

盤谷へ来た方は誰もしつて居る洗髮寺ソトケイのあのブウカウトーングといへば釋尊の齒をおさめてあるといはれて居る百二十尺もあらずと云ふあの塔かとすぐうなづかるゝ所であるたましくなき妻とその母との三年忌に際して自分の歌反古からこれだけ集めて名前をかりに表題のやうに致したといふものは亡妻の骨の一部もその塔下に收められてあるものだから何となく忘れかねて……かつ一つにはここは又盤谷のいはゞ名所の一つでもある事故自分の後々の在遷記念となるまいものでもあるまいと考へたからである



暹國第一の塔

大正
4. 7. 28
内交



市谷盤す渡見りよ上塔のーケサトツ



洗^ツ髮^ト寺^ケの塔そたよし

物見すれは

青葉の底は

盤谷の街

*

久方の空コバルトに

晴れゆきて

こゝ地よき日よ

盤谷のまち

春といへと薄着ウスガキに汗のにしむ國
冬とてわきて衣更せず

兩の中車のなかにほろの中に
親しき友と夜戀かたる

おもひあまり終にさらはと音つる、
よすか少きわか家路かな

ふるさとほ北へ船路を三千里
月のよき國はなのよき國

執着のころに戀ふる千葉たのし
すかたかへたる我や大蛇オホヘビか

遠あさの沖に潮にのこされし
船のひと夜のさひしかりける

思案シアン島は今そこそとさくもの、
島かけ暗くふねはえゆかす

あめふれは汜河シカにこりて岸見えす
霧の仙頭センタウいつか眠れる

朝五時の仙頭寒し霧ふかし
キヤビンの窓にたゞ微吟する

※ 盤谷にかへる途中安南沖にかゝる

たゞなはる安南の山は海に入り
燈臺白く岸はかすめる

※

箱庭の塔のこくとくに燈臺の
白く日にてる安南の山

※

大蛇のあつさにたえてわたつ海に
みつかふと見ゆる安南の山



右に寺ひたりに馬場の
小路ゆけは
菩提樹の幹に
トツケーひるなく

※ 盤谷につく

自らの名をトツケーと
そのまゝに
なくトツケーの
いかに氣高き

註

トツケー 暹人のよぶ名にして屋守の大なる種類なるべし種々の斑紋ありて大なるは尺餘のものあり古き家、木の幹にすみて壁高くトツケーとなく壁にこの名あるなる可し學名はしらず

淋しみの夜をトホくと闇ゆけは
草履の音のいのちきさめる

花のうた枯野の詩趣とおのかし、
世はさまざまの人こゝろかな

我が耳には清き樂わか眼には
美しき花うたにも詩にも

すひあくるあふらとほしひ細々と
留守の小ふねにメナムふけたり

* まやみてより

黒かれもとかす熱さの戀さめて
たゝ青白き人の顔かな

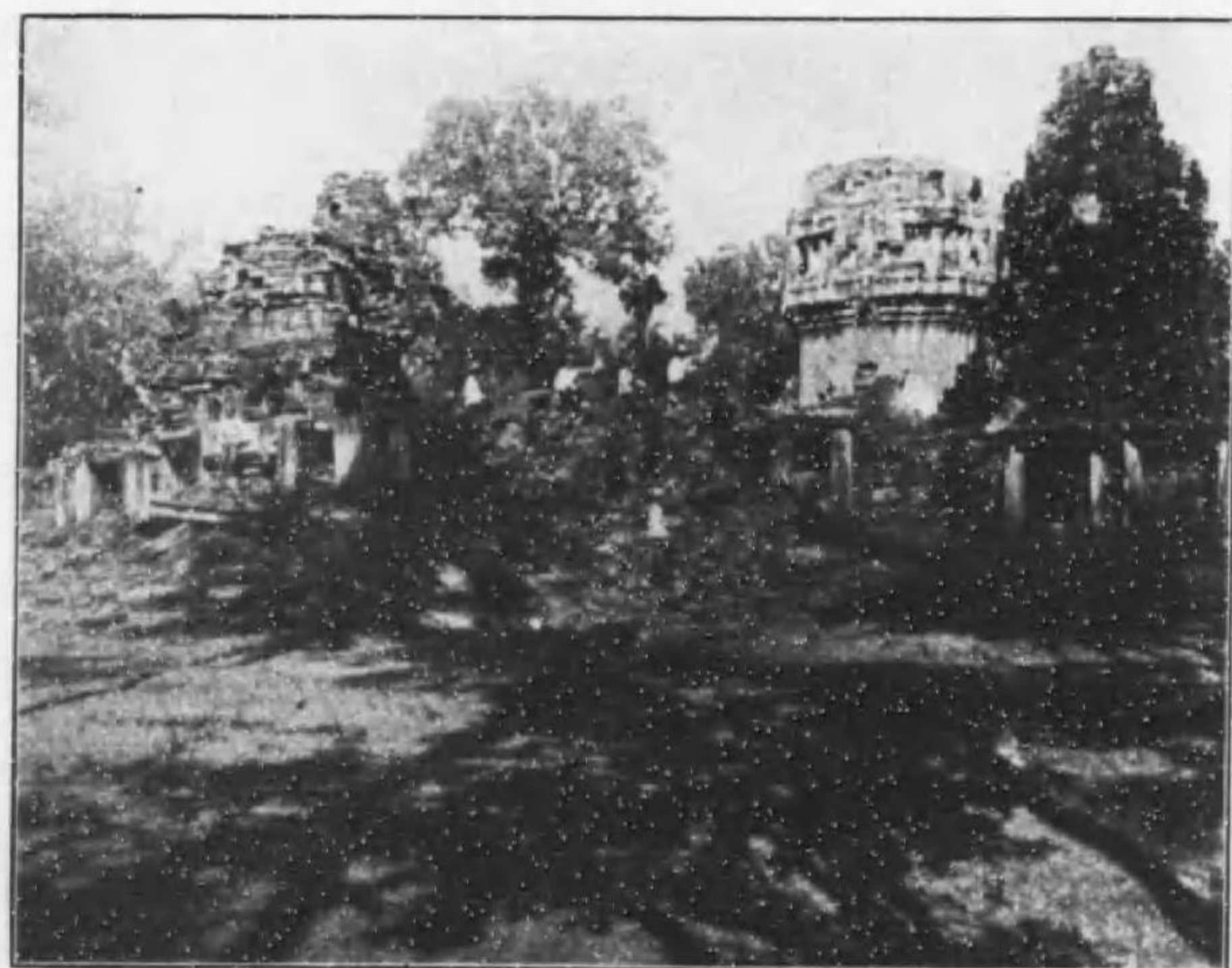
さよふけて熱ひやさんとひとりたゝ
こゝろを碎く厚氷かな

病む人の熱高まれは心臓の
鼓動は夜のしゝま破れる

くりかへすこゝろの底のさめ言を
誰か耳にせんかなしき夕



景のヤチユア都舊



址廢のヤチユア都舊

※ 清田某同じくチラスにて斃る

曉のかねなかなりて安かに
日ことくくにひとを葬る

※

やむ人の夢驚かさしとそと起ちて
かやの蚊うてはうつ手おのゝく

※

故郷をおもへは遠しかなしくも
親おもふ兄おもふ友をしそ思ふ

※

夢の世を熱にゆめ見る人妻の
若き血潮は色あせにけり

かみのものとりかたつくの手の甲に
あつき涙のしたゝるゝかな

* 妻ゆきてより

物おもひ胸ふたかりて泣く時は
人かたはらにあらなまほしな

*

芭蕉葉のちきれくの間をは
軟かにふく風なまぬるき

*

むかしよりみな泣く月に我も亦
心からなく身とはなりけり

とおもひて故國こくにの空をなかわれと
富士の高嶺は見ゆべくもなし

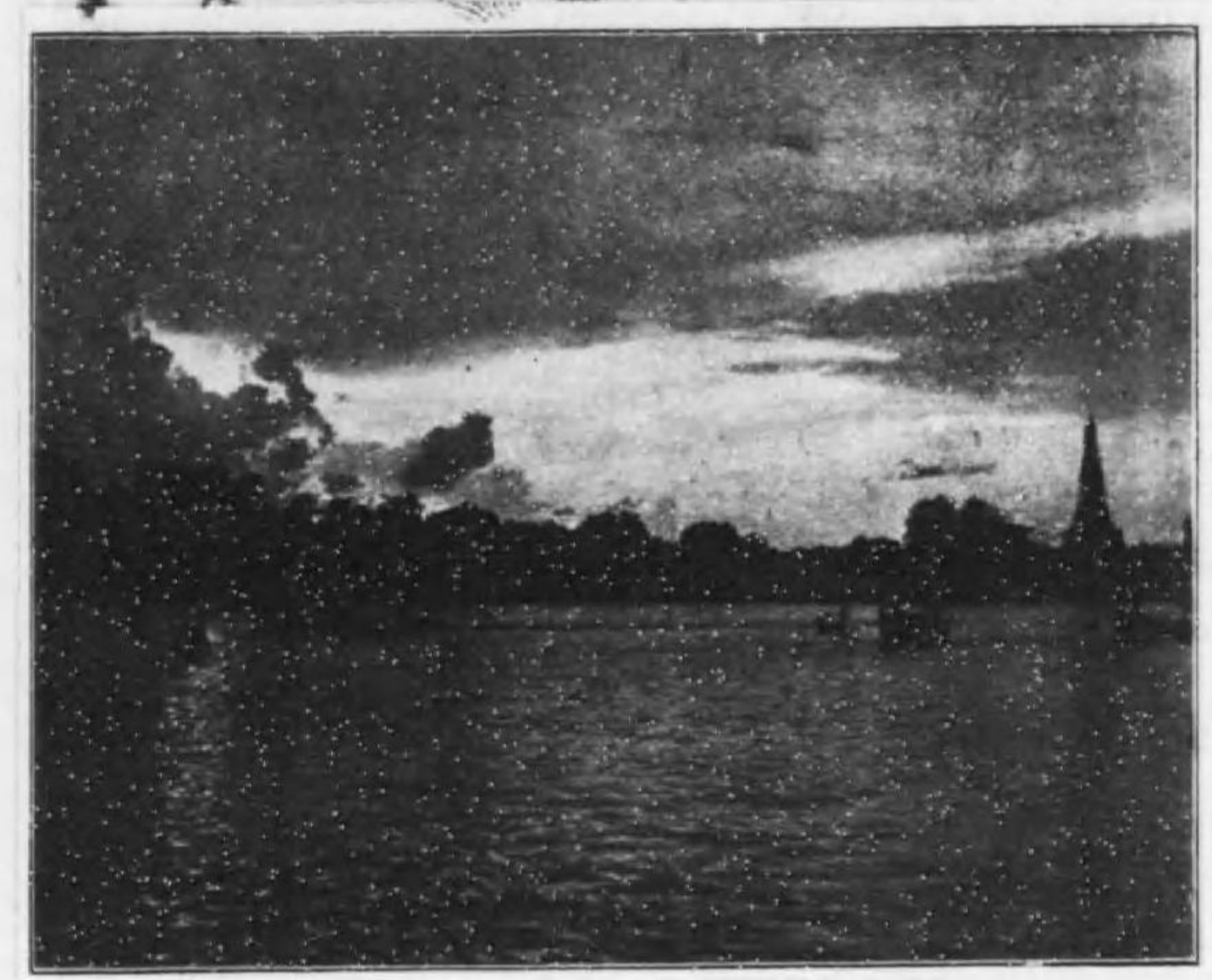
※ 第一の月命日に

雨ふれは氣も狂はなむ心地するを
まいてや今日はつまゆきし日そ

雨は我はいとけなきより喜ひぬ
なかんか爲めに思はんか爲めに

ハーモニカ吹く人逝きて我ひとり
笛かなてんと想はすなりぬ

メナム河の夕景



メナム河一鉢いづにて
船やとひ

十二時迄の
月見せしかな

一鉢は七十四錢に當る

あひのりの人力車に
ひとり悠々と
月夜をすねて
かけめくるかな

露臺わたり常夏の國の夜はふけて
あふらのにほひしはしひまなる

いらたちて氣もそはくと街のやみ
何おもふとなく犬のことく歩みぬ

僧はみな鬱金のころも人はみな
白の上着に年老いてゆく

物うりの聲もたつきの冬くれは
草木と共にかれくてゆく

夜ゆけは蛙のこゑもきく道に
ひるは電車のかしましきかな

雲をいてまた雲に入る四五分の
月なかめつゝ人力車飛はせる

月の夜を山家に白くたく楢の
烟ますくに天に入るかな

流星のたゝひと筋に走り來て
南の國にきゆる我かな

豆の葉の卷鬚の蔓の我が手をは
伸はせとまかむ力竹なき

緋の衣齒白き女幻視して
狂ひたりやと我を疑ふ

破れたるこゝろを今は靴下に
女もすなるつくなひをする

死をねかひ薬のむ人生をはかり
薬のむ人ひとにそありける

* 隣家の妊婦モルヒネ自殺を企て果さず

この國の人のことくに赤裸々に
せなのほくろも君には許さん

* ある人の不遇を涙に物語るを我も涙に徹死してきくその人親しまんといふ
さらばとて我も

赤き灯の下に語らふ友の顔
酔ひし如くに赤くもあるかな

新案のかやりともせはたきからの
人のむくろに似たりけるかな

最終の電車のすみに酔をふけは
血にうゑし蚊の二つ三つかな

かりそめの仕事に肩のつようこりて
按摩よぶほと我は老いたり

水にたゝ美しく美しく流しやる
石油のひかり石油のひかり

かなしみの淋しみの數かずくの
おもひ亂れて夜もねむられす

世の中のかなしみは胸にはらはたに
しみくめくる血の涙かな

妻も妻の母もいとこも良ちやんのまな子もマニラのキーンソンも皆逝きぬ
恩師金杉博士の奥様も松操院様とかなしくもかはり給ひぬおもひめぐらせば
たゞ涙のみぞしげかりける



二日ふれと熱は降らす
我に物を
おもへくと
心臓をゆる

大正二年霜月マラリアタイフオイ
Fにかかり佛蘭西病院に入る

燃えあまりさてはみなきるわか胸の
熱故の熱かされはうれしき

ちさきわか妹の唱歌おもひ起す
こゝはお國を三千里かな

あかつきのチャーチのかねのひく時
鳩のゆめよりさめにけるかな

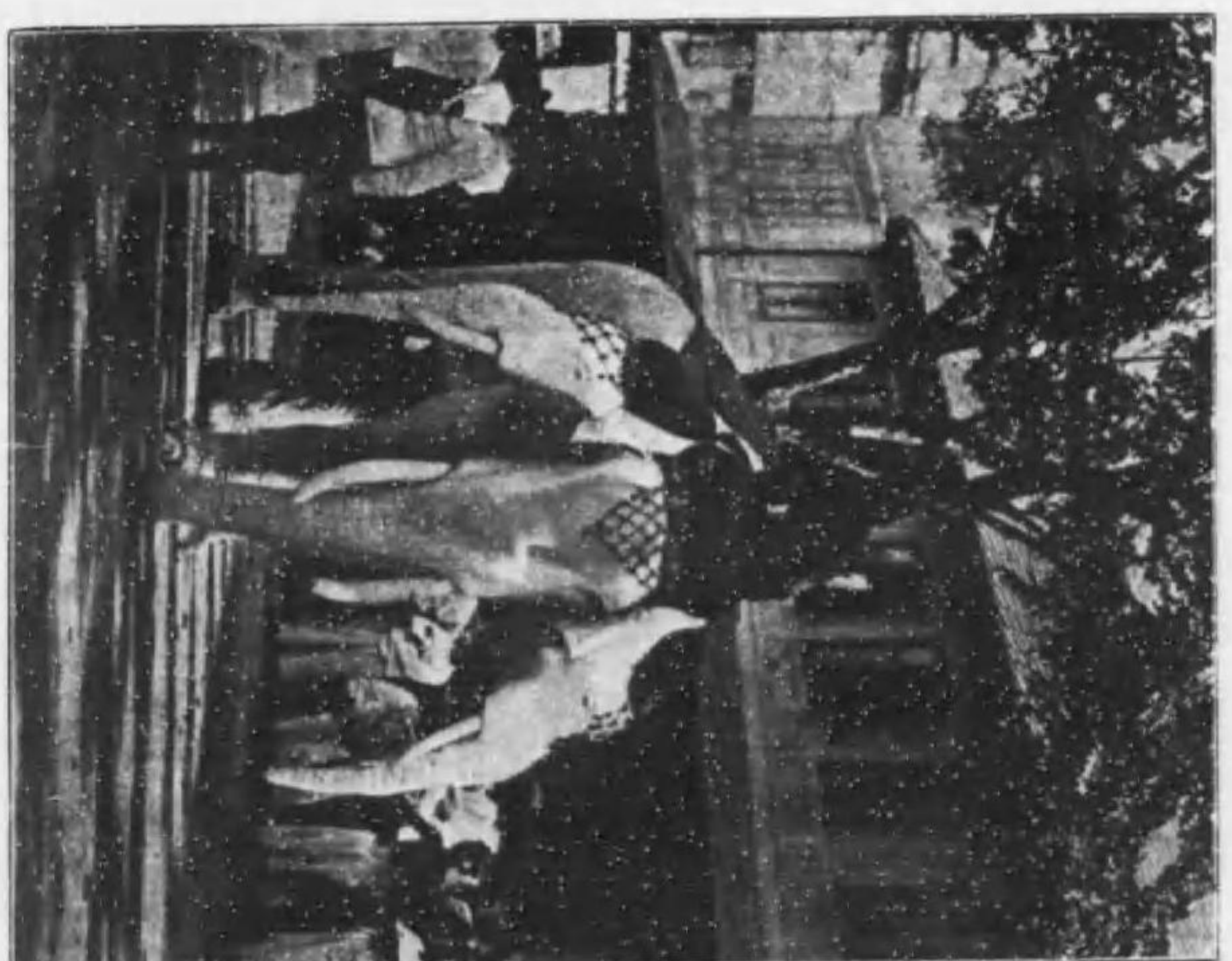
病床の窓より向ひの屋根を見れば
餌あさるらし白黒のはと

つとにさめ曉の星に物おもふ
やめる身かなしなんだたふる

キニーネに酔ひてしあればさすかにも
電車のひき夢心地にきく



見所 國 道



象頭三つへ加い中列行際其すななて詣寺回一年毎王國

こゝろにもあらぬそらこと歌につゝり
つかれしかみをやすめんとも思ふ

やますあれはやますあれはとおもふこと
あつき涙の頬にしけかり

黒かれの甲かふりしことくにて
熱やみつゝも人をしそ思ふ

※ 大正二年師走病いえてより盤谷を去つて海路八時間なるこしーラチャーに
来りしむ

シイラチャーは紺青湛ふ海にして
赤き夕日は思案島に落つ

* 材木會社の一哩計りの棧橋ありて海中に突出すること長蛇のごとし

海の中におもひ出ななき棧橋を
年暮るといふに散歩して見つ

* 我がすむ家は當國知名の貴族陸軍中將さきの農商務大臣チャオヒアスラサック氏の別墅にて海中に築れたる樓閣なれば満潮の時はさながら浮屋のごとし

ひとりたゝ浮家になかき夜のふけて
のひたるひげに年をおもひぬ

* 海上約五哩の所に島ありコシヤンと呼ぶ我はあて字して思案島と記す

思案島はもやの中よりうかひ出ぬ
あさのなかめは晝にそありける

* 大正三年元旦によめる

浪のひゝき浪のせゝらきなみの音
うき家のまとに初日の出かな

* ホームシツクをさる人に尋ねられて

母こひし父なつかしとおもはねと
まめにませとは常にのるなり

*

戀しとはおもひのつとひ濃かに
ひとり忍ふあはきかなしみ

*

我が姓は海に従ふゆかりより
赤きこゝろは血貝より濃し

*

魚はねて夜半にめさめて忘れたる
夢をおもへは雞鳴きにけり

昨は夜半に故國の友と夢にあひて
のころくまなく旅かたりしぬ

常夏の國に住む我はちありて
色黒かるを願ひけるかな

前は海うしろは山よ我はこゝに
三千里外天降り來し

月淋しさひしき夜をひとり身の
おはしまにうたふ歌君やしる

心はへなほ我をかさりて潔しとす
けかるゝまてのいのちなるかな

蟹は泡ふき河豚はふくるゝ我はなけく
世は潮水のせちからきかな

かけ畫の美人の顔は日々によし
我が戀はん人はかくやあらなむ

しほ干れはこゝしき岩もあらはれて
水吸ふかきの音よもすから

思案島はしまのかたまり朝な夕な
胸に横たふうきのかたまり

思案島にともしともりぬ夕暮の
うれひも消えぬ青きともしひ

鏡なす海の面をひたはしり
棧橋にゆけは月はのほりぬ

浪移島にて月夜のうみに吟すれば
ハンブラ山に赤き火あかる

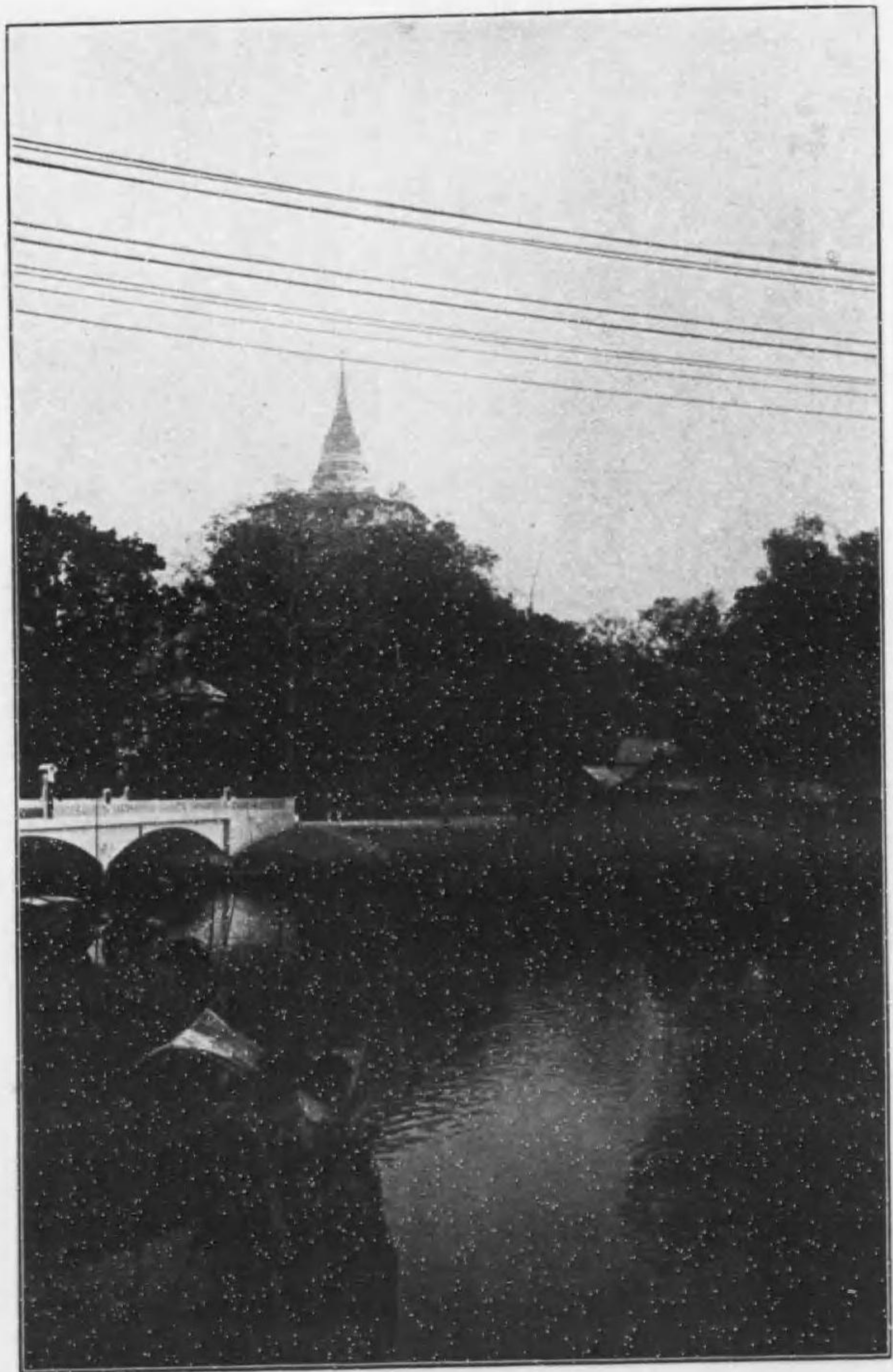
* シイラチヤル灣内コロイと呼ぶ一握の小島あり棧橋はこの島を貫きて向海中に突出す運路にてコトは島の案

たゝなはるこゝしき巖のいはかねに
口とちて生く蠣やうらめし

沖に漂ふとのみ思ひしはおるか
不平のなみは岸にこそ高けれ

小船にて浪移島わたりにうそふけは
黒船ゆかす月さへかへる

人あらぬ月夜にひとり棧橋に
盆踊りなとおとり見しかな



塔のーケサトツフ

※
シイラチャーの海おもしろや夕はえて
キネオラマとそなりにけるかな

※
なみのよせてまたかへりゆくたひ毎に
よすかもてとは常にのるなり

※
けたまましき汽船の笛につと立ちて
まつ人もなき海をなかめぬ

※
船は去り月傾きて島黒し
何遠吠えず陸の上の犬

薄墨の海にせゝらく夜のなみ
詩になく我の胸の血のこと

辛うして浪を飛び出し飛魚の
浪に入るより又せんすへそなき

この宵もまたこよひとて浪の音の
いねな泣けとて岸にさわかし

喉頭にかタルありけり家居して
うたも歌はず日の暮るゝまつ

かろきつゝか我が鼻息をとゝむとて
ふたける時に死の影を見る

二階にてなに跳るらむと思ふ程
いかつちの音とゝろき渡る

時計の針に鏽出ぬさひはすこしなれと
こゝろかなしき我にはいたき

思ひきりてうたはむまはむ叫はなむ
悲しきときは居たまられす

*

オニス仲間のオルトギの若き娘の顔がたち帝劇にかつて見しハムレットの母に似たり

まなざしの女優浦路に似たるより
帝劇に見しハムレットおもひぬ

*

我はゑみぬ君もゑみぬゑみぬゑみぬ
すは何事の起らむとする

*

見ちかひたりや人の顔あはたなしと
思ひしに今はそくくと見る

*

大蛇の死骸を見たる日

口は眞紅すかた眞黒に眼光かる
大蛇のむくるクレオの化かも

バイブルにふと見いてたる花は妻を
忘れな草のうつろひし香はや

*
押し花にそとキッスしてうつろひし
色香におもふ死の奇しきほこり

*
歌ふをきゝ鳥の聲のなましひに
人なかすかな我なかすかな

*
ヘルメットのの中の木の心なるを頂きて
ヘルメットはかるきに限るとおもへぬ

*
歌もつきぬおはしまに立ちて眺むれば
なみのうねりは盤谷にさる

*
三日月は佛陀の眉か尊としや
念佛誦してあらをろかまむ

*
蠣の岩に空氣銃うち放ちたり
手答へありぬかきや死にゝし

*
磯つたへ友かり訪ふと砂利ゆけは
兵隊のとき足音のする

美しき日に小高き丘の四阿しやあに
心ゆくまでなきにけるかな

水貯ふる土甕つづみあまたならひしを
髑髏ぶつろうもやあるとそとのそき見ぬ

ひとすちに丘に馳せのほり眺むれば
暹羅灣しんらわんあはし今雨にして

天地に大なるもの山ならず
海ならずたゝ人のかなしみ

大正三年五月九日早朝たつまきを見る水平線より直角に天をつく白線のため
雲霞にもあらむがごとし

雲を得てのほりゆくなる龍白し
わか幸先のきさしともなれ

かすれく岩の上を洗ふ浪よせて
小磯一里を白しふきする

盤谷よりかへり來れば思案島
思ひなかくもまた横たはる

水平線のかなたは未だ暮れぬらし
思案島しあんじまの右いまたそかるゝ



盤谷
ブウシット公園の一部



僧 暹

※
夕されは思案小島は夜もすから
燈臺の灯の紅にもゆ

※
うち割れはからくれなゐの西瓜すいかなり
血汐ちひざにおちてはむをいみしも

※ 月命日の當日

戒名なとひく、誦すなるかりそめの
回向せんにもた、ひとりかな

※
思ひいつる物みなかなし命日は
男やもめをなかず日にそある

※ スウキツルなる良一郎兄に

三年見ぬ親しき友のすむとき、
ラインの月にあこがるゝかな

※

菩提樹に月高くくあかる時
ライン河畔の君しのふかな

※

春日てふ名のしかすかに戀しけれ
花晨月夕幾年か來し

※

君は「良」を我は「美」を名にし負ふ
あやめ別たぬかきつはたととも

みめ形美しくこそ生れ來され
*
いつくに行くも魔風戀風

サノサなとひとりうたへは聲かれて
*
かなしみ誘ふふしとなりぬる

室の外は盡きせぬ海よ室の中は
*
かなしきなみた盡きせぬおもひ

提灯なとまひるともして遊ぶ程
*
淋しき日なりかけろふたつ日

やみてあれは故郷のみそおもはるゝ
*
天神山のそれ松のよき

やみに吐きし痰何となくなまぬるく
*
もし血にもやと灯ともし見つ

往診のかへりたらく坂くれは
*
ましろの胡蝶くるひむれとふ

船のゆきてまた船のくる三日の間
*
淋しき浪のさゝめきをきく

* 岸そへの漁師の家に人死ありや
讀經の聲や泣く聲のする

* 東風ふきて常夏の國も涼しかり
バターこゝれはかさね着もする

* かうもりの柄なと擬しては沖の船を
ねらひうちするまねもするかな

* 當國の式部官と相しりて乞はれて送る寫眞の裏に
めぐりあひて月まんまるきセイラチャーに
語らへてより君や忘れし

* 再びワットサケーにのぼりて
ワットサケーの塔そたゝよし後に我も
青葉ふかゝる下に眠らむ

* 自分の寫眞の裏に
なかれゆくうき藻の花も春くれは
みつのまにく漂ひてさく

* トルコ帽きたる我が顔おかしかり
かゝみにぎりてパシヤの笑する

* たまひめの姫島こひし我すみし
家のむすめはひめとやなりにし

204
574

大正四年七月十八日印刷
大正四年七月廿二日發行
(定價金五拾錢)
全書四冊 第一冊
發行所 櫻部 美知
印刷所 植田 庄助
印刷所 東洋印刷株式會社
發賣所 東京區二大橋〇 菊屋出版部



故郷よりよすかありけり空晴れて
うれしき日なり思案島もてる

*

終

